

「罪の自覚のあるところに恵みも満ちあふれる」

ローマ5：19-21

堀田修一 23・2・5

I 「一人の人の不従順と一人の人の従順」

「すなわち、ちょうど一人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、一人の従順によって多くの人が義とされるのです」：19。

1. 一人（アダム）の不従順→「神である主は人（人類の代表アダム）に命じられた。『あなたは園のどの木からでも思いのまま食べて良い（けちな方ではなく、神の豊かな恵み）。しかし、善悪の知識（真の善悪の知識は神のみが与えて下さる象徴の木の名称）の木からは、食べてはならない（神の権威、ご命令に従うかのテスト）。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ』」創世記2：16, 17。「蛇（蛇を通して誘惑する悪魔）は女（エバ）に言った。「あなたがた（アダムとエバ）は決して死にません（神に背いて善悪の知識の木の実を食べても）。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって（根本的な罪は、神に造られた人間が自分の領域を守らず神のようになろうとする高慢。）善悪の知識を知る者となる（神に祈り尋ねることなく、自分で善悪を判断する＝これが人類の歴史の誤りが証明している）ことを、神は知っているのです。そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく（健康のために、ある数値を下げなければならない時も、コマーシャルでおいしい物を見続けると目に慕わしく食べてしまう誘惑がある。人間は大金や金の延べ棒で誘惑されると、それは目に慕わしく不正な賄賂を受け取る。神から離れた人間の歴史を見ると日本でも世界中で行われ続けている）…それで、女はその実を取って、ともにいた夫（アダム）にも与えたので、夫も食べた」創世記3：4～6。アダムは、愛と義のリーダーシップを発揮して「悪魔ではなく、恵みとまことに満ちた神に従い、その木の実を食べてはいけない」と言うべきだった。互いの助言必要。最初の人類の代表のアダムの神への不従順により、人間に罪が入り死が入った。※アダムが罪を犯した直後に、「あなたはどこにいるのか」3：1と神に立ち返ることを呼びかけて下さる神の愛。私たちにも同じ呼びかけが！人間の救いの「原福音」が語られている神の恵み＝「わたしは敵意を、おまえ（悪魔）と女（人間）の間に、おまえの子孫（悪魔の側に立つ者たち、神に敵対する人々）と女の子孫（神に立ち返り、神に属する人々）の間に置く。彼（神が与えられる人類の回復の代表キリスト）はおまえ（悪魔）の頭を打ち（キリストは十字架と復活によって悪魔に対しては決定的な勝利を得られる）、おまえ（悪魔）は彼（キリスト、キリストの体である教会）のかかとを打つ（悪魔は、キリストと教会を誘惑し、攻撃するが、決定的な勝利を得ることは出来ない）」創3：15。

2. 一人（第Ⅱのアダム、人類の代表キリスト）の従順によって多くの人が義とされる→「キリストは、神の御姿（神御自身）であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました（最後のアダムとして人間を救うために）。…自らを低くし、死にまで従い、それも十字架の死にまで従われました（生

涯、一つの罪も犯されない神への完璧な従順、私たち人間の罪の贖いのために神に呪われた者として十字架の死にまでの完全な従順)」ピリピ2：6～8。この主を信じる多くの人々に主の義（神の前に正しいと認められる義）が転嫁され、救われる（罪の完全な赦しと神との関係の回復と永遠のいのち、永遠の神との親しい交わり）。私たちは、自分の罪を神に告白した後は、十字架の主、復活の主を見上げましょう。神は、主の恵みの故に、完全な罪の赦しと義（主の恵みとまことに満ちた品性）を与え続けて下さいます！

Ⅱ「律法が入って来たのは、違反が増し加わるためでした。罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました」：20。

1. 契約期分割主義神学の律法についての誤った理解＝「旧約聖書の時代、神は律法によって人を救おうとされた。神はイスラエルに対して『この律法を守りなさい。そうすれば救われます』と約束された。しかし、人間は律法を守ることが出来なかった。そこで神の救いの計画は破綻した。それが旧約聖書の時代。次に神は、キリストによる新しい救いの計画を立て、人類に与えられた。それは律法による救いではなく、主を信じる信仰による救いである。それが新約である」。この教えは、律法についての誤りから生じている。律法は人を救うために与えられたのではない。旧約聖書の中に「律法による救い」という教えはない。BC二千年代のアブラハムの時に、行いによる救いではなく「信仰義認」が語られている。創世記15：6。BC1, 500年代のモーセの律法にも、人の行いでは義とされないのが、罪の赦しのための多くの動物の血（新約の主の十字架の血を指し示す）が献げられる教えがあり、大祭司が年に一度、民全体の罪の贖いを至聖所で行う儀式も、新約のキリストの十字架の贖いを指し示していた。イスラエルが救われたのは、アブラハムとの契約の故であり、旧約も新約時代も救いは神の一方的な恵みです。イスラエルが律法を守ったからエジプトから救われたのではなく、救われた民が、神の喜ばれる歩みの基準として律法が与えられた。これは新約時代の私たちにも当てはまる。

2. 「罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれました」：20。このみことばは、罪をどんどん犯せば犯すほど、赦しの恵みも満ちあふれるという意味ではない。真の意味は、自分がいかに罪深く、数え切れない罪を犯しているかを聖書のみことばと御聖霊により自覚すればするほど、神に正直に罪を告白し、主の十字架の恵みによる神の赦しの恵みを実感し感謝と賛美に満ちあふれるという意味。聖歌229「驚くばかりの恵み」。自分の罪の深さの自覚のない人は、神の驚くべき愛と恵みに感動できない。神は、聖書、御聖霊、自分の心を見させる出来事を通して自分の罪に気づかせられる。そして自分の罪を深く自覚し神に告白することと神の驚くべき赦しの恵みときよめを受けることは比例する。年々、神に聖められたパウロの罪の自覚の深さと神の憐れみへの感謝→晩年の告白「私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。『キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした」Iテモテ1：14-16。※証し。「パリサイ人は…祈りをした。『神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者…この取税人のようでないことを感謝します。…一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんで下さい。』あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人（自分が罪人

と認める人)です。だれでも自分を高くする(自分の罪を認めず高ぶる)者は低く(義と認められず、神に受け入れられず)され、自分を低くする(自分が罪人と認める)者は高くされる(義と認められ、神に受け入れられる、赦しの恵みに満たされる)のです』ルカ18:11-14。
「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる」哀歌3:22。感謝!

Ⅲ「それは、罪(アダムによる罪の性質の遺伝と私たち自身が犯す数え切れない罪)が死(神との分離、地上での死と死後の永遠の滅び、永遠の苦しみ)によって支配したように、恵み(神が下さる一方的な恵み、主の十字架と復活による完全な罪の償いによる罪の赦し)もまた義(主が御父の律法、ご命令への完全な従順により獲得された神の義)によって支配(神の支配=神の国が心に生まれる)して、私たちの主イエス・キリストにより永遠のいのち(主を信じた時から与えられ、神を深く知り続けるいのち、神と永遠に親しく交わるいのち)に導くためなのです」:21。

祈り:罪を深く自覚し主を信じ続けるとき、恵み(罪の赦し、義認、永遠のいのち、神との親しい交わり)が満ちあふれることを感謝します。